
この青く広い空の下で

涙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この青く広い空の下で

【Nコード】

N8917N

【作者名】

涙

【あらすじ】

俺の中でそれは封印されたものだった。

偶然の不運（前書き）

初投稿です。よろしくお願いします。

偶然の不運

体育館の出入口で、俺は立ち尽くしていた。

目の前にはグラウンドと、そこでサッカーをしている同級生達。それをただ黙って見続けていた。

「……ねえ、授業終わったよ」

誰かに肩をさすられて、俺は夢の中から引き戻された。ハッと目覚めると隣の席にいる女の子と目が合った。

「起きた？」

「……うん」

ぼーっとしたままとりあえず頷く。寝ぼけ眼で周囲を見渡すと、皆は友人と談笑したり、帰る準備をしたりしている。

……そうだ。予備校で授業中だったんだ。寝てしまっていたのか。「良く寝てたねー。半分くらいは寝てたんじゃない？」

隣の席の女の子はケラケラと笑う。俺は少し罰の悪そうな表情をして、頭をかいた。確かにノートはかなり中途半端なところで終わっている。別に真面目に授業を受ける気があったわけじゃないが、さすがに半分も寝ていたのでは何となくもったいない。

「あ、ノートコピーする？あまり綺麗じゃないかもだけど」

俺の視線が白の多いノートを向いていることに気付いた女の子が言う。

「え？ あ、いや、いいよ……」

急に言われたのでつい断った。友人であればコピーをお願いしたかもしれないが、所詮は予備校の授業であるし、そのうち学校で同じ内容を習うだろうという思いもあった。

……というか、俺はそもそもこの女の子のことを知らない。ここまで仲良さそうに話し掛けられておいてなんだが。

「あ、他にあてがあった？ まあ、後でDVDを見直すこともでき

るしね」

じゃあ、という感じにその娘は参考書やノートを鞆に片付け始めた。彼女の言う通り、後で録画した授業を見直すこともできる。

「……あの、起こしてくれてありがとう」

今更ながら一応、礼を言っておく。

「え？ いいよいいよ」

軽く手を振って彼女は答える。今更気付いたが、彼女は百合ヶ丘の制服を来ている。百合ヶ丘学院といえば名門女子高として近隣では有名である。中高一貫でお嬢様ばかりと噂に聞いたことがある。

目の前の彼女は気さくな感じだが、特別お嬢様という感じではない。良く見てみると顔は真ん中くらいだろうか？ ……いや、自分も自慢するほど美形じゃないが。

「七瀬」

「あ、やつほー」

自分も帰る準備を始めようかというところで、隣の席の女の子が誰かに呼ばれたようだ。

「後ろの席にいたのか、気が付かなかった」

声の主が近づいて、……！！

（な、何でここにコイツがいるんだ？）

俺はその場を離れようと急いで片付けをする。

バサッ。

慌ててしまって、カバンの中身を床に盛大にぶちまけてしまった。

「大丈夫？」

七瀬と呼ばれた女の子が手伝おうとしやがむ。

「だ、大丈夫」

俺は下を向いたままカバンに中身を掻き込む。急がないと。

「……泉？」

その声が俺の名前を読んだ。背筋がゾクツとする。紛れもなく、彼の声だ。俺は振り向くことも、返事をすることもなく、無理やりカバンに落とし物を突っ込むと、急いでその場を去った。

「お、おい」

「あ、ちよっと！」

二人の声を背に教室を出る。

何だってアイツがこんなところに……！

偶然の不運（後書き）

感想・批評お待ちしております。

望まぬ再会

俺はそれからというものの、次の授業に出るか悩み続けた。授業に出れば、間違いなくアイツに出会うだろう。いや、その前に会うかもしれない。

……それは非常に気まずい。俺にとってそれはもう封印された記憶だったからだ。

自然と予備校から足が離れていく。

そして、今日も予備校で授業がある。違う科目だが、予備校に行くのは躊躇われた。

行きたくなかった。

予備校には来たものの、中に入る気がせず、二の足を踏んでいた。どこかで時間をつぶそうか。そう考えて、俺は予備校のあるビルの屋上に向かった。

この予備校、西南予備校屋代校は六階建てのビルの一階から三階にある。四階から六階にはとある企業のオフィスが入っていて、自分とは以前に間違ってエレベーターで六階に行ってしまった。偶然にもその時に屋上へ上り、なおかつその扉の施錠が緩んでいることに気付いたのである。

ガチャ。

屋上へ続く扉は案の定、緩んでいてすぐに開いた。ぼーっと上を見上げると、俺の心と対照的に澄んだ青い空が広がっている。

(はぁ……)

溜め息をつきながら視線を元に戻すと、そこには小屋が一つ建っている。ここが秘密の隠れ家だ。いや、何故ビルの屋上に小屋があるのかは知らないけど。古びているし、たぶん工事でもしたときから残ってるんじゃないだろうか。

とぼとぼと小屋に近づいて行くと、窓から中に誰かがいるのが見

える。誰だ？ 他にもここを知ってる人がいるのだろうか。企業の人だとちよつとまずいな。自分に残された聖域がすでに侵されたことに落ち込む。が、それとそこにいたのはこの前の七瀬とか呼ばれた女である。

まずい。とつさに後退りしてしまう。そしてそれにタイミングを合わせたように目が合う。

（げっ！）

こちらに気付いたそのコは腕をぶんぶん振っている。何なんだ。

俺はすぐさまその場を離れようと屋上の出入口に向かう。

「待って！」

扉の開く音と同時に背後からの声。もちろん返事どころか振り向きもせずに俺は走りだす。そして、屋上の出入口に着いた俺は鍵を開け——あれ？ 開かない。

（何だ、この野郎。タイミング悪い！）

「待って！」

ガチャガチャやってると後ろからの声。ああもう、何でこんな時に開かないんだ。

ガシッ。

慌てて鍵を開けようとする右腕を掴まれる。

「もう、待ってってば……」

そこには例の女。息を切らせている。片手を膝につけて前傾姿勢をしている。

「はあはあ……、何で逃げるのよ……」

さすがにここまで来ては仕方がない。俺は観念して鍵からゆっくり手を放す。と、キィと音を立てながらわずかに扉が開く。今更かよ、という思いと引けばよかったことに気付かず、押していた自分に呆れる。馬鹿だ。

「……もう逃げないから手を放してよ」

両手を上げようとして上げられず、片手だけ上げて降参のポーズを取る。自分で言うのもなんだが、顔は仏頂面だ。

「ホントに？ もう手間を取らせるなあ……」

まだ息が切れるのか、肩をわずかに上下させながら、今度は両手を膝につけて前傾姿勢でこっちを見る。上目遣いで見られてドキリとする。そんなに可愛くはないが、さすがにちよつと胸に響く。

「自己紹介が遅れたね。私、七瀬雪乃。よろしく」

屈託のいい笑顔で手を差し出す。

「……俺の名前は泉拓哉。よろしく」

その手を掴む。柔らかい。

ぎこちない握手は望まぬ再会を現していた。

望まぬ再会（後書き）

感想と批評お待ちしております。

忘れ去られるべき記憶(1)

「じゃ、改めて私の名前は七瀬雪乃。よろしく」

「俺は泉拓哉。よろしく」 古びたテーブルと乱雑におかれ、ところどころ錆びたパイプ椅子しかないプレハブ小屋に声が響く。

結局、捕まった俺はプレハブ小屋に連れてこられて、彼女と対面に座っている。

七瀬と名乗った彼女はというと、神妙な面持ちの俺と対照的に、制服の胸元をゆるめ、両腕の袖をまくり、あちー、と言いながら下敷きでわずかな冷風を自らに与えている。いくら4月とはいえ、ダッシュしたのだ、暑いだろう。しかし、その姿はとてもお嬢様校百合ヶ丘の生徒とは思えない。

「まずさ、何で逃げたのか聞いていい？」

右手で持った下敷きをピシッとこちらに向けると、だらけた姿勢ながらそのまま彼女は言い放った。その表情は姿勢とは裏腹に真剣そのものだった。

「そ、それは……」

「私、何かした？　すごく気になるんだけど」

「ち、違うよ。七瀬さんには関係ない話だよ」

不機嫌そうな表情をして、七瀬さんは身を乗り出した。顔が近づいてとっさに椅子ごと後退る。近くで目にして初めてわかったが、その顔はぺちや鼻にやや細い目で、髪はショートより長いが肩には届いていない。身長は低い。自分も男子の中では低い、彼女も女子の中では低いほうだろう。

「じゃ、柳田？」

その言葉が胸に突き刺さる。必死に閉じていた扉が開いてしまっそうだ。

「凶星みたいだね。何かされた？　アイツ、けっこう冷めたところあるから」

彼女がアイツと呼ぶ、柳田晃司。彼が……。

「聞いたよ、同じ中学だって？」

（バレてる！？）

柳田からすでに話を聞いていたのなら、もう何を反論しても無駄だろう。

「そうだよ、同じ中学」

観念して話し始める。

「逃げてたのは会いたくなかったから」

「会いたくない？ やっぱり何かされた？」

彼女は怪訝な顔でこちらを見つめる。

「そうじゃないよ、何かしたのは俺のほうだよ、それは……」

俺の家はここから山のほうに行ったところにある。高嶺という地区だ。ここはとにかく広く人口密度が低いのだが、俺はそのごく普通の家で生まれた。父は町工場で働き、母はそのパート事務員。兄弟は妹が1人いる。随分生意気だが。ここまでだと田舎の普通の家みたいだが、1つ違うところがある。

全員がサッカー狂だったのだ。

父が学生時代にサッカー部で、今も草サッカーで活動している影響だろう。もちろん有料でJリーグはおろか世界のサッカーリーグ、ワールドカップも見ることができる。休日は家族総出で遠方に赴いての草サッカーか、地元の北見イレブンナイナースの応援である。世間が日本のワールドカップ初出場で盛り上がる時も、マラドーナやジーコのプレイを何度も見ていた我が家ではまだ日本が結果を出せないことは十分にわかっていた。

そんな家庭で育ったせいかな、俺は小さなころからサッカーボールを蹴っていた。父の草サッカーに混ぜてもらったりしていた。

しかし、いかんせん田舎であるため、サッカーをしようにも相手はおらず、1人でボールを蹴っていた。地元には北見イレブンナイナースができてからはサッカー熱が高まったものの、それは最近の話

だし、もともと野球熱の高い北見県にあって、全校生徒が三百人あまりの小さな小学校ではほとんどが野球部に取られ、キャッチボールが主な遊びの手段であった。

中学でも状況は変わらないだろう。そう考えていた俺に急な話が飛び込んでくる。

誰かがサッカー部を作ろうとしている、という話である。

馬鹿な話だ。

それが第一印象だった。一学年の男子がわずかに二十人ちょっとしかおらず、半分以上は野球部に入り、後は陸上部と卓球部、吹奏楽部に入るのである。十一人はおろか、集まっても半分といったところだろう。一年目は全く試合に出れないし、二年目以降も控えがほとんどなしの状態で下級生を使わなければならない。中学での一学年は体格差に大きく影響するし、地元にジュニアサッカーチームもない以上、一から教えないといけない。

さらに大問題なのが、高嶺中学のグラウンドにはサッカーゴールがないのである。体育の授業だって野球なのである。ボールすらない。

また、先生達が頷くだろうか？ ただでさえ、小さな学校に部活が乱立すると他の部の人数に影響する。野球部はそこそ強いので部員の減少に繋がるだろうから反対するだろう。

つまりは無理なのだ。小学校のころから地域の野球チームはあってもサッカーチームはない。それは中学でも同じなのだ。

俺は野球部に入るつもりがないので、一番楽そうな卓球部に入ろうと考えていた。無難な選択肢である。サッカーはしたいが、道具もなければできるかもわからない部活に入るほど俺も暇じゃない。

「君が泉拓哉君？」

そんなある日、俺のもとへ1人の男子が訪ねてきた。身長は俺より一回り高い。どちらかというとき長身でこざっぱりとした髪型と意志の強そうな目をしている。整った目鼻立ちをしており、口は真一文字で結ばれ、不用意に開かなそうな印象を受ける。パツと見は少

々近づきがたいオーラをまとったスポーツマンという感じである。

「そうだけど？」

「俺の名前は柳田晃司。君をサッカー部に誘いに来たんだ」

俺は目を見開く。コイツか。見慣れない顔だ。小学の時と同じ面子なので、すぐにわかる。靴ひもの色から同じ一年生だろう。そういえば隣のクラスに転校生が来たって誰かが言ってたっけ。

「サッカー部なんてウチのガッコにはないよ」

「これから作る」

「道具はないし、サッカーを教える先生にあてはあるの？」

「道具はこれから揃える。指導なら俺がする」

何様だよ、そう思った。こっちだってあつたらいいな、と思いながらも諦めてきたんだ。仕方なく、わざわざ遠方まで草サッカーしに行ってるのだ。コイツは果たして大変さを知っているのか。

「無理だよ、断る」

「やってみなければわからない。君がサッカー好きなのは周りから聞いている。一人でも多くの仲間が欲しいし、経験者なら尚更だ」

確かに周囲にサッカーをしようと声をかけたり、ワールドカップやJリーグのことを良く話す。ちよつと有名だったんだろうか。

「とにかく断るよ。十一人集められるの？」

「君がその一人目になってくれればいい。他にも誘ってみる。やればできる」

その真剣な表情にはすごみがあるが、気圧されないように立ち向かう。

「もう卓球部に決めたんだ。余所を当たってくれ」

「……わかった」

落ち込むわけでもなくキツとした目でこちらを見つめながら静かに頷く。くると後ろを向き、彼は教室を出ていった。詰問を終えて力が抜けた俺はへなへなと椅子に座り込んだ。言葉の端々に力強さがあり、面と向かって言われるとすごみがあった。

それからしばらくしてサッカー部が承認されたとの話を聞いた。
だが、こんなゴールもないところで何をするのか？ 果たして部員
が集まるのか？ 所詮無理だろう、と部活希望用紙に卓球部と書いて提出した。
しかし、問題はそれからだった。

忘れ去られるべき記憶く1く（後書き）

感想と批評お待ちしております。

忘れ去られるべき記憶(2)

そこで生じた問題とは、……揃ってしまったのである、十一人がまさかのことだった。男子の約半分がサッカー部に入るという予想だにしないことが起こってしまった。更には学校側が一通りの道具一式を揃え、挙げ句の果てにゴールまで作ってしまったのである。北見イレブンナイナースがJ1に昇格した機運の余波があったかもしれない。

しかし、これにはさすがに閉口した。あれだけ俺が望み、諦めてきたものを柳田はあっさりと手に入れたのである。

環境の整ったチームは初出場の秋季大会で一年生だけながら初勝利を飾ると、三年次の大会では県大会に出場して学校中を沸かせた。その中心にいたのは柳田であった。中盤でゲームを掌握し、自らも得点してチームの快進撃を支えた。後で知ったことだが、彼は名門東京ゴールデンナイツの下部組織で活躍していたらしい。

汗まみれ泥まみれ、冬は雪にまみれながら楽しそうにボールを追うサッカー部員達の姿を、俺は体育館の出入口から見つめるしかなかった。サッカー部に入ることを拒んだ罰だ、彼らの背中がそう行ってるかのようなだった。

そして、彼らがサッカーを始めたことを境に、俺はサッカーから離れた。ボールを蹴ることもなければ、以前のように観戦することもなくなくなった。ワールドカップだって見なかった。嫌でもサッカーから離れられない自宅の環境が嫌になったりもした。高校でももちろんサッカー部には入らず、帰宅部としてたまに予備校に通う程度である。

「だから、柳田の顔を見ると思い出すんだ。あのときもっと真剣に考えていれば……、って」

全てを話すと、俺は七瀬さんから視線を逸らした。「ふーん、な

るほどね……」

汗も乾き、腕を組んで話を聞いた彼女は天井を見ながらうなった。
「七瀬さんには悪いことしたと思ってるよ。関係ないことに巻き込んで」

「二人の間にそんなことが合ったとはね。……あと、呼び捨てでいいよ。私もそれでいいから」

「そう、わかったよ。じゃあ、呼び捨てで」

七瀬は頬杖をついて横を向いている。その口がわずかに動く。小さくて声が聞き取れない。

「え？ 何？」

「え？ あ、いや、……何て言うかな。私が聞いた話とはちょっと違うから」

「違う？」

彼女は何か言いたげにしながら頭をかきむしってる。

「その、すぐ、わかると思うよ」

何が違うというのだろうか。まあ、向こうには向こうの事情があるのかもしれないし、サッカーを真剣に考えず、離れていった俺に非はあるだろう。

「……そろそろいいかな？」

言うことは言ったし、もう帰ろう。

「ちよ、ちよっと待って。うんと、明後日の水曜日、また講義あるでしょ？ それが終わったら駅前公園に来て」

「駅前公園？」

屋代駅の近くにはわりと大きな公園がある。そこに？

「でも、その講義は……」

柳田も来るのである。彼女もそのことには気付いているだろう。俺は場合によってはサボるつもりでいた。

「わかってる。だけど、来て。授業は後でDVDって手もあるでしょ？ 私、このままじゃ良くないと思うの」

彼女は訴えるように言う。断ってもいいが、予備校を辞めるわけ

にはいかない。もう授業料は払ってあるのだから。つまりは二人と顔を合わせる機会がまだあるのである。これ以上、予備校を居心地の悪い空間にしたくない。

「いい考えがあるの、だからお願い。このプレハブ小屋仲間、嫌な仲にはなりたくないから」

彼女のしようとしてることはわかる。話に乗るだけ乗って、一学期だけで予備校を切り替えてもいいか。駅前にはまだいくつか塾や予備校はある。親を何とか説得してみようか。

「いいよ、待ってるからさ」

「本当！？ 良かった。大丈夫、任せて」

彼女は心底嬉しそうに言うのと、胸に手をあてた。

「だから、これから仲良くしようね」

美人じゃないが、笑うとそこそこ可愛い。百合ヶ丘の女子に笑みを浮かべられるのも悪くない。

「じゃあ、そろそろいいかな？」

携帯を見ると、今日取っていた講義もほとんど終わっている時間になっていた。

「うん、またね」

小さく手を降る彼女を背に俺はプレハブ小屋を出た。

忘れ去られるべき記憶く2く（後書き）

感想と批評お待ちしております。

事の真相（1）

（相変わらず冴えない顔してるな）

トイレの鏡に映っている自分の顔はいつも以上に冴えなかった。もともと容姿的に目立つものは何もない。背も少し低いし、髪型も家の近くの床屋でいつも通り、である。

（さすがにそろそろ床屋はまずいかな……）

そう思いながらワイシャツのボタンを一つ外す。ウチの学校は学ランだが、もう衣替えの時期なので、ワイシャツ姿だ。外は涼しくなってきたが、これからの対峙を前にして少し緊張して暑さを感じた。七瀬はおそらく柳田を連れてくるつもりだろう。長身からの見下ろすようなすごみを思い出すと、手に汗がにじむ。

水曜日になるのはあつという間だった。いつも通り学校に行って、家に帰ったら下らないバラエティー番組を見たら寝る。それだけだった。これから、七瀬が何をしようとしているかわかってるし、気乗りはしないがそれには乗っかるつもりだった。人に合わせるのは苦手じゃない。適当に話を合わせて、予備校には講義を受けに行く。それを淡々と繰り返し返すだけ。いつも学校でしてることと同じ。わずかな義務をこなすだけの怠惰な日々。

（おっと、もうこんな時間だ）

携帯を見ると、思ったより時間が過ぎていた。外を見ると、空は赤みを失い始め夕方から夜へと移り変わろうとしていた。

「いたいた」

トイレから出ると、左手のほうから七瀬の声が聞こえた。見ると、噴水の近くに七瀬と、……柳田がいた。七瀬は以前のように手をぶんぶん振っている。その元気な姿に、引きつった笑顔をしながら軽く手を上げた。

「久しぶりだな、泉」

近寄ると柳田の低く威圧感のあり声が胸を刺す。うう、何でこん

なことしなきゃいけないんだ。

「……久しぶり」

「とりあえずベンチ座ろ、ベンチ」

目を合わせずにボソツと呟くように言うと、七瀬がベンチを指差した。なぜテンション高いのだろう、この女は。

(?)

ベンチに向かう間の柳田の動きに違和感を感じる。わずかな距離だったので何かはわからないが、何かがおかしい、そう思った。

「さてと、まずは何かから話そうか？」

七瀬を間にして三人でベンチに座る。柳田は無言のまま、やや前屈みに座っている。俺も当然無言だ。

「二人とも何か話そうよう、同じプレハブ組じゃんか」

もー、と少しむくれながら七瀬は俺たちの顔を交互に見る。彼女はプレハブ小屋のことを気に入ってるようだ。

「ほら、柳田。さっさと話さないよ」

バン、と柳田の背中を強引に叩く。それに反応するわけでもなく、膝に肘を置いて手は口元を抑えていた。

「……俺は運が良かった」

柳田が前を見ながらボソツと呟く。

「野球部にあった事件を知ってるか？」

視線だけがこちらを向く。

「野球部？」

「中学の時のことだ」

柳田は手を下ろし、自らの膝の上で手を組んだ。そして、視線を再び前に向けた。

高嶺中学野球部はなかなかの強豪だ。県大会には何度も出てるし、いつも遅くまで練習し、少数精鋭で謳われた。十年くらい前に北見で行われた北信越大会に出場したときは、生徒総出で応援に行ったらしい。その野球部も自分たちの代では低迷していた。サッカー部に人が流れたことも原因の一つだが、その大元の理由は聞いたこと

がある。

事の真相（1）（後書き）

感想と批評お待ちしております。

事の真相（2）

「暴力事件だっけ？」

外部招聘したコーチが部員に暴力を振るったとか。確か俺が小学生のころの話だ、挨拶をしなかった部員の髪の毛をコーチが掴んで張り倒したと聞く。田舎では噂の伝達が早い。

「それのおかげで野球部に入るヤツがかなり減った」

それは間違いないだろう。いつもは学年の半分は野球部に入るところが自分たちの時は片手で数えるくらいだったのだから。

「そして、予算が余ったのは知ってるか？」

再び柳田が俺に視線を向ける。俺は首を振り、それに応える。

「野球部への一極集中に危機感を感じた大人達は“もう一つの野球部”を作ろうとした。そこへ、俺が話を持ちかけた」

再び柳田は目前に視線を向ける。もう赤から黒へと空の色は変わり、外灯の灯りがわずかな力で闇へ対抗し、俺たちを包んでいた。

「折しも、北見イレブンナイナースのJ1昇格で学校は沸いていた」
外灯の細い灯りが噴水を照らし、キラキラと輝く。さながらそれは闇の中で必死に自己を象徴する蛍のようだ。

「スケープゴートみたいな感じ？」

七瀬は百合ヶ丘の制服から伸びた足をぶらぶらさせている。上空を見上げ、うつすらと見える星々に何か合図をしているかのようにも見える。風が吹き抜け、フワッと彼女の短い髪が浮いた。ライトに照らされ、彼女の顔はくっきりと陰影が付いている。

「それに近い」

また、柳田はまっすぐ前を見る。

「おかげで内容と結果、共に得ることができた」

大げさに言えば、確かに奇跡みたいなことを起こしたのだ。柳田自身も県選抜の候補に入ったって噂も聞いている。

「だが、一人の友人を失った」

突然、柳田の目が俺を見据える。思わず、俺は自分自身を指差す。相変わらず意思の入ったその瞳は頷くかのように瞬きをする。

「俺は悪かったと思っている」

そして、彼はこちらを向き直った。足がぶつかりそうになったように、七瀬が足をこちらに寄せた。

「それを夢見ながら諦めてきたヤツに、中途半端な状況で声を掛けてしまった」

だから……、と柳田は続ける。

「断れたのは仕方ないと思っているし、それをきっかけにサッカーから離れてしまったことを悔やんでいる」

「うん、続けて」

七瀬が柳田に声を掛ける。柳田は再び膝に肘をつき、両手で口元を押さえる。静かにはつきりとその口元が動く。気付くと俺は、膝のうえに置いた握りこぶしを強く握っていた。

「……転校してすぐ、風の便りで学年一、いや学校一サッカーに詳しくて、好きなヤツがいると聞いた。様子を見に行くと、そこには楽しそうにサッカーについて話す泉がいた」

（やっぱり俺だ）

確かに俺は学年でも学校でも一番サッカーの話ばかりするサッカーバカだった。イレブンナイナースの近況をインターネットでチェックして、逐一話題にあげていた。

「得られるはずの友人を失ったことに気付き、そして気付いたところにはもっと大きな物を失っていた」

中学を卒業して城川工業に行った俺は……、俺は……」

急に鳴咽へと変わる。サッカーの古豪城川工業で何かあったのか？ 両手に顔を埋め、途切れがちになりながら、柳田は言葉を続けたようとする。微かに音を作り出そうとするその唇を支えるかのように、そっと七瀬が柳田の背中に手を添える。

「後は私から話すよ」

柳田の耳元で七瀬が小さく言う。よくがんばったよ、そんな声が

聞こえる。

「……ねえ、噴水まで歩かない？」

優しい、そしてきっぱりとした意志を持った瞳がこちらを向く。
促されるかのように立ち上がった俺に続き、俯いたまま柳田が立ち上がる。

(……!!!)

そして、俺は気付く。衝撃の事実を……。

事の真相く2く（後書き）

感想と批評お待ちしております。

事の真相（3）

（……！）

力なくふらふらと歩く柳田の右足がぎこちない動きを、いや引きずっていると言ってもいい。

「わかった？」

「城川工業に入った柳田は選手としてとても期待されていた」

ベンチに座り直した俺たちはうなだれる柳田を支えるように、彼を真ん中にして座った。

「新チームになった一年の秋にはベンチ入りするまでになっていた」西の古豪、城川工業。最近は見なくなったとはいえ伊達にサッカーバカやってない。県内四強の一角で、近年はかつてほどではないにせよ、必ずベスト8に顔を出す強豪だ。確か出身のプロ選手もいるんじゃないかったか。イレブンナイナースのユースができてから減ったとも聞くと部員数は多く、そこでベンチ入りするくらいだから相当な実力だったんだろう。

「……それは天ヶ崎との対抗戦だった」

天ヶ崎学園も県内四強の一角であり、豊かな環境と私立の利点を活かして、こちらプロ選手を輩出する実力がある。城工と天ヶ崎の一戦は県西ではちょっとした知名度を誇るダービーマッチだ。

絞りだすように柳田の唇が動く。さっきまでの切れ味はなく、重たくすごすごとしている。

「後半から途中出場したセットプレーでの競り合いで相手選手と重なり、そして……」

淀んだ瞳が感情もなく、右足を見つめる。

「クソッ」

「止めて！」

右の拳を柳田が振り上げ、それを七瀬が体を乗り出して制す。

「もう止めて、柳田。……そして、柳田はサッカー選手としての命を絶たれたの」

東京ゴールデンナイツの下部組織で活躍し、中学時代には無名のチームで快進撃を見せ、ユースの選手に負けず県選抜の候補にまでなった男を襲った悲劇だった。

「……俺は中学のサッカー部、皆の期待を背負っていた。だが、もう合わせる顔もない」

柳田は両手で顔を覆い、絞りだすように声を出す。顎のあたりに光るものが見える。涙だ。

「だから、怖い。皆と会うのが。期待を裏切り、どんな顔をすればいいって言うんだ」

「柳田は悪くないよ。精一杯のプレーをして、その結果なんだから」七瀬が精一杯慰める。柳田は顔を拭うとすまない、と彼女に声をかける。

「偉そうなこと言うようだけど、俺もそう思う。サッカー部の皆が柳田を慕っていたのは遠くから見てもわかった」

ホント偉そうだな、と思いながら、だから、と続ける。

「一年で城工のベンチ入りってすごいじゃん。胸を張っていいと思う」

柳田も苦難の道を歩いてきた。それがわかった。自分のつまらない劣等感がバカらしく感じてきた。

「ありがとう。……七瀬から話を聞いた。俺たちはサッカーを愛しながらサッカーから離れざるを得なかったんだ」

俺は、と柳田は続ける。

「こうやって泉と会ったのを機に変わりたい。あの時は何も決まっていなかった中、無理を言っただけだった。気がはやっていた。最大の味方を得られると思ってとにかく声をかけてしまった。断るのも無理のないことだった。本当はこの前のときも走って追い掛けたかったんだが、足が、な」

スマン、と柳田が頭を下げる。

「そんな……！ 俺のほうこそ、勝手に劣等感抱いて……、柳田のそんな思いも知らず、サッカーから離れていつて……」

俺も頭を下げる。俺たちは同じ傷を負っている。わずかなタイミングの違いで、握手するはずの手でお互いに胸にナイフを突き刺しあってしまった。

「ハイ！」

左側で一人、話を聞いていた七瀬が突然、胸の前で手を叩く。

「誤解は解けた！ これからまた一緒にサッカーバカやればいいじゃん。同じプレハブ組同士さ。ねっ？」

満面の笑みで問題解決、と言わんばかりに言う。根が楽天的なのだろうか。思わず俺と柳田は顔を見合わせる。

「私、いいもの持ってきたんだよ、これで万事解決！」

ガサゴソと自分のカバンを漁ると、取り出したのは……サッカーボール？

「兄貴のをちょっと拝借してきてさー。ほら」

ずい、と俺たちのほうに突き出す。いきなりのことにとどうすればいいのかわからない。これは柳田も予想してなかったようで、珍しく目を見開いて固まっている。

「……え？ ほら、アンタらの好きなサッカーボール」

更に突き出す。

「いや、ほらって言われてもなあ……」

「ああ……」

柳田も困惑気味だ。ちよつと前までトラウマだったものをハイ、と突き出されても……。

途端に七瀬の表情が崩れる。怪訝そうにこっちを見ている。

「男同士ってさ、こうやって友情を深め合うんじゃないの？ 違う？」

何だそりゃ。再び俺と柳田は顔を見合わせ、そして、……笑った。

「お前、何わけのわかんねーこと言ってるんだよ」

「ホントホント。第一、ココはボール遊び禁止だし」

「え、マジ？」

どうやら何も知らなかったらしい。その上、サッカーボールさえ出せば、真剣に何とかなると思っていたのだろうか。その言葉を聞いて、俺達はまた笑った。

事の真相（3）（後書き）

感想と批評お待ちしております。

この青く広い空の下で

「よっと」

久しぶりにやったりフティングはわずかに七回。

「昔は三十回くらいできたのにな」

「なかなかやるじゃないか、さすがだな」

「伊達にサッカーバカやってなかったよ」

転がったボールを軽くトラップした柳田は、左足でフワリと蹴り上げる。うまいな。

「……っと」

十五回。右足はほとんど使わなくてだから、相当頑張っている。

「俺のほうは五十回くらいだったかな」

思ったより多くなかった。百回くらい行くかと思った。

「リフティングはあまり得意じゃないんだ。一対一なら負けないが、この足じゃな」

噴水に入りそうになったのを止める。トラップしたボールを七瀬が拾いに来る。

「私は……、っと」「やめろ、スカートだろ」「あらあら、気を使ってくださったの。ありがとう」七瀬はスカートの裾を上げ、足を組んで一礼する。芝居がかった言い方と合わせると、本当のお嬢様のような。

「そんなことしてるから、女っ気ないって言われるんだよ」

「えー、今のは百合ヶ丘！　って感じだったでしょ」

「騙されるかよ、お前みたいなのが百合ヶ丘をかたるな」

「ひっどーい！　聞いた、今の」

ははは、と笑って返す。仲がいいな、この二人。

「二人が会ったのは何で？」

コロコロと転がってきたボールを右足で柳田に軽く流す。

「コイツがいきなり喧嘩売ってきたんだよ」

「違うって。表現の問題じゃん」

「講義で隣になったとき、足どうしたの、っていきなり聞いてきたんだ」

それはちよつと……。でも、彼女らしいといえばその通りだ。

何となく彼女の性格がわかった気がする。全然女の子らしくなくて、おせっかい。

「プレハブ小屋はコイツが見つけたんだよ。鍵をぶち壊したのもコイツ。どこが百合ヶ丘のお嬢様なんだか」

「ちよつと蹴っ飛ばしたら開いたんじゃない」

「だから、お嬢様がドアを蹴っ飛ばすかよ」

（なるほど、それで誰も知らなかったわけか。百合ヶ丘のお嬢様が蹴っ飛ばすねえ。面白いコだ）

柳田が再びリフティングを始める。トントントン、と左足だけで器用にリズムを刻むが、十回を越えてくるとバランスを保つ右足が辛くなってくるようだ。

「十八回」

「増えた増えた」

「ほとんど変わんねーよ」

七瀬が嬉しそうに手を叩く。反面、柳田はあくまで冷静だ。中学の時にちらりと見たが、いつもクールだった。部活のときに大声を張り上げてのを見ると、意外に心の根は熱いのだろうか。

「そろそろ帰るか。誰かに見つかるはずいな」

柳田が体を曲げてボールを拾い、ほらよ、と七瀬に投げて返す。

七瀬はそれを胸でトラップ！ ……ってあれ？

「あつれー、うまくいかない」

固まる俺と柳田。検討違いのところに転々と転がるボール。

「何してんだ？」

「リフティング」

柳田の冷静なツツコミ。さも当然と言わんばかりの七瀬。

「だから、スカートでやるな、っての」

右足をひきずりながら、柳田がめんどくさそうにボールを拾いに行く。

「今度こそ終わりだ。ほら行くぞ」

「ケチー、スケベー」

それは違うだろう……。夜の闇の中をボールを持って歩く柳田に続いて、俺も歩きだした。

一週間後。

「はー、英語だるい。何で他の国の言葉なんてやらないといけないの」

プレハブ小屋に七瀬のイヤイヤ声が響く。

「将来的なことを考えてだろう」

教科書をカバンに詰める柳田。

「まあ、英語は難しいよね」

とりあえず、無難に答える。俺達は自然とプレハブに集まるようになった。

「いいもんいいもん、私、海外行かないし」

何故かむくれる七瀬。

「ほら行くぞ」

促す柳田。

俺はドアを開けた。涼しい風が頬を撫でる。

「今年は暑くなるのかなー？」

「天気予報では暑くなるってさ」

「マジでー！ このプレハブとも夏はお別れかな……」

「自習室で我慢しろ」

他愛もない会話。その幸せ。

見上げるとそこには青い空が広がっていた。

この青く広い空の下で（後書き）

一応、第一章完ということ。
感想と批評お待ちしております。

烏の濡れ羽色（前書き）

ここから第二章です。

鳥の濡れ羽色

卵一パックと豚肉肩切り落とし、ほうれん草、もやし、何でもいいからきのこ。

（内容から察するに卵とじか）

まじまじと手に持ったメモを見ながら俺は思った。

俺の名前は柳田晃司。ここ西南予備校に通う高校二年。今日は駅前のスーパーが安いので、母から買い物を頼まれている。

（思えば、母さんもよくわからないな。……基本的に女ってよくわからんが）

四年前、母さんはほぼ決まっていた恵まれた生活を捨て、東京から俺を連れて北見県高嶺市に引っ越してきた。それからは看護師をしながら女手一つで俺を育てている。父さんと結婚したのもかなり若かったし、直情経行タイプなのかもしれない。今、一番仲のいい女子もお嬢様学校に通うお転婆なのだから、ますます理解に苦しむ。（まあ、思春期は気変りが激しいものかもしれない）

階段を登りながら思う。母はともかくとして、同年代の女子や男子はその傾向にある。

（ん？）

考え事をしながら階段を登ると扉が開いている。

（しまった。誰かいるか？）

ここ、予備校のあるビルの屋上は立ち入りOKというわけではない。誰かに見つかったら締め出されるだろう。こそこそと開かれた扉から顔だけ出して外を見る。

（何だ、アイツか）

七瀬だ。こちらに背を向けて、誰かと一緒に忍び足で歩いている。そういえば、仲間を増やすとか言ってたっけな。

（だが、ばれちゃ仕方がない）

メモをポケットにしまい、扉から出ると鍵を静かに閉めた。七瀬

のことだ、また何か企んでいるのだろう。それでいて、鍵を締め忘れるとはアイツらしい。

（やれやれ）

アイツのおせっかいで泉と仲直りできたが、コンビニとかで売っている、美味しいのかわからないような新作の味のお菓子を買う癖はどうにも合わない。きゅうり味って何だ、きゅうり味って。

見上げると、今日も空は青く広がっている。いい天気だ。最近は気温も上がってきた。

（今年は暑くなるかもしれないな）

袖をまくる。七瀬たちはプレハブ小屋の前までたどり着いて何か話している。中には泉がいるはずだが。

（あー、わかった）

俺が企みに気付くと同時に、七瀬の友人らしき人物がプレハブ小屋のドアを開け、中に入る。やっぱり。続いて、七瀬。何してんだか。

「おい」

出入口につっ立ったままの七瀬に声をかける。七瀬は手を上げ、ハローと声をかけてくる。無視してドアとの隙間から中を覗くと。あー……。

「見て、なかなかでしょ」 七瀬がピースして喜んでいる。中には散乱した教科書を慌てて拾う泉。まだこちらには気付いていない。

「何がなかなかだよ。おい、泉」

「あつ、柳田」

カバンに教科書をつっ込んでいるが突っ掛かってるようで、うまく入らないらしい。まだ驚いている。七瀬は泉には、このことを秘密にしておいたはずだ。失礼、と言いながら俺は中に入る。

「災難だったな」

「驚いたよ。一人でいたら、いきなり知らない人が入ってくるんだもん。ビックリして教科書落としちゃったよ」

泉はまだ興奮しているのか、いつもより口数が多い。

「タイミングばっちりだったでしょ」

七瀬が後ろからしゃしゃり出る。やかましい、と軽く一蹴。

「で、アンタが？」

「初めまして、椎田瑞穂と言います」

顔を向けると、そこには百合ヶ丘の制服を来た女子が一人立っていた。泉より若干高いだろうか、スラッとした体つきで顔は整った目鼻立ちをしている。物腰は清楚で、長い黒髪はこの前小説で呼んだ烏の濡れ羽色という言葉があてはまるかのような艶やかさだ。なるほど、これぞ百合ヶ丘のお嬢様か。

「俺は柳田晃司。で、こっちが……」

「い、泉拓哉っ」

泉は立ち上がって背筋をピンと伸ばす。いきなりお嬢様に話し掛けられて緊張してるんだろう。だいたい七瀬のドッキリに見事にはまるのは泉の役目だ。

「瑞穂は私の親友っ！」

七瀬が椎田の肩を掴んで顔を突き出す。コイツと椎田の違い様といたららない。

「まあ、座ろうぜ。講義まで時間がある」

俺は皆を促して先に椅子を引いて座った。

烏の濡れ羽色（後書き）

感想と批評お待ちしております。

お嬢様のお誘い（前書き）

椎田さん登場しました。

お嬢様のお誘い

「椎田さんはそのと同じ学校？」

「そう、一緒」

そのの、と言われてちよつと、と突っ掛かる七瀬は無視する。

「去年まではクラスも一緒だったの」

椎田さんはニコリと微笑む。大きすぎない目に長い睫毛、スツとした鼻と口。なるほど、これはなかなかの美人だ。

「今は別れちゃったけどねー」

あーあ、と七瀬が両肘をテーブルにつけ、顎の辺りで顔を支えながら呟く。こちらはぺちゃ鼻で中の中か、口に出したら激怒するだろうな。

「文系と理系だからね、仕方ないよ」

「だって、同じクラスの人つまらないんだもん」

今度はテーブルにもたれかかって指遊びしている。落ち着きがない。

「じゃあ、椎田さんは文系なんだ」

へー、と泉が話し掛ける。こちらは美人を前に少し緊張しているようだ。

「ええ、保育士志望なの。それと、さんはなくていいわよ」

「じゃあ、椎田。それなら、なるほど、文系だな」

保育士とはまた、お嬢様だな。子供の育児を考えてじゃなからうか。

「瑞穂も英語取ってるの」

「福崎先生のね」

「『福崎の勝つ英語』？　すごいね！」

「じゃあ、俺たちの次の時間か」

福崎というと、けっこう成績は上だ。俺たちが取っている西野がセンターレベルだから、二段階上で上位国立クラスだ。百合ヶ丘の

中でも英語は間違いなく上の方だろう。

「瑞穂はねー、語学が得意なの！」

「理系が苦手なだけよ」

「だいぶすごいよ！ 上位国立レベルでしょ？ 自分なんかセンターですら危ういのに」

「つか、お前が威張ることじゃねーだろ……」

しゃしゃり出る七瀬を制す。コイツもコイツだが、泉も目をキラキラとして尊敬の眼差しで椎田を見ている。さっきから泉は驚いてばかりいる。もしかして俺、泉を買い被っていたか……？ いや、相手の強さを認めるヤツは上達が早いし、うーん……。

「どうしたの？」

「あ、いや……」

泉と目が合ったので、再び椎田に視線を戻す。

「他の科目は講義取ってる？」

「数学の2Bを取ってるわ」

「あ、そういえば同じ講義室にいたよね？」

「川崎先生のね」

と、なると数学はセンターレベルか。確かに理系は苦手みたいだが、こういうヤツは努力するからな。侮れない。

「私と柳田は物理を取ってるよね！」

「ああ、一応専門だからな」

俺は城川工業の物理工学科に所属している。一年から物理があるという珍しい学科だ。もちろんレベルはそんじょそらの工業高校だから、進学希望は少ないが。

「私も物理は負けないよ。この前の小テストは93点！」

「す、すごい。俺は64点……」

百合ヶ丘と泉の通う屋代南ではレベルに差があるが、七瀬の物理レベルはホンモノらしい。ちなみに二人は二年から物理が始まったらしい。

「や、柳田は？」

「俺は一年のころ、平均で94点」

だいぶレベルを落としたから以上、専攻する科目の基礎なら90点代は維持したい。

「そ、それもすごいね。あちゃー」

「あー、1点負けた。チクショー!」

「誰が畜生だ、誰が」

泉は苦笑いしながら頭を抱え、七瀬はまたわーわー騒ぎ立てている。

「すごいことね」

椎田は笑顔だ。その笑顔はまさに女神の笑顔で、普通の男子ならメロメロだろう。

「大したことじゃない。うちのレベルじゃそれでも国立が見えるかどうかだよ」

城川工業は地方のスポーツの得意な工業高校。国立を目指す俺にとって、それは最低条件だ。

「何の、一年の数学は平均87!」

「95」

「また負けたー」

七瀬は頭を抱えて、テーブルにもたれかかる。百合ヶ丘がほぼ進学ということを見ると、単純比較はできない。

「でも、次は負けない! 瑞穂のこの前の英語は91なんだから!」

「あ、雪乃」

「それは反則だろ……」

この椎田という女、英語は相当なレベルだな。さすが『福崎の勝つ英語』なだけある。俺も早くもう一つレベルを上げないといけない。

「へへーん、これは勝ったでしょ」

「だから、お前が威張ることじゃねーだろ……。二度言わせんな」
相変わらず何なんだ、コイツは。

「皆すごいなあ」

泉はポリポリと頭をかく。こう言っちゃなんだが、泉の通う南高は特に進学やスポーツに力を入れていないのだから、競っても難しい。ちなみにサッカー部も弱小で通っている。

「イレブンの谷田部選手の出身高校は？」

「広島短大付属高校」

「あら、すごい」

「そ、そうかな？」

へへへ、と笑う泉は即答で返していた。おいおい、脳みそ使うところ間違えてねーか。

「まあ、勉強するためにあるのが予備校だ。時間はまだある。すぐにこんな女抜けるさ」

「ちよっと失礼ね。簡単に負けないわよ」

「雪乃も気が抜けないわね」

談笑した時の時間の流れは速い。もう講義の時間だ

「さあ、時間だ。そろそろ行くか」

「あ、もう？ 予習してないや」

「なら、私は自習室に行こうかしら」

各々が立ち上がる。で、一人だけそれを止める者がいる。七瀬だ。
「ちよっと待った！ 本題に入っていない！」

「本題？」

七瀬は忘れてた、と呟く。椎田もそういえば、と立ち止まる。

「来週、ゴールデンウィークでしょ！ 皆で遊園地行こう、遊園地」
それは突然の、お嬢様だかお転婆だかのお誘いだった。

お嬢様のお誘い（後書き）

感想と批評お待ちしております。

出かけよう！

「遊園地？ 何でまた」

「5月5日、私の誕生日なの！ それで皆で行こう」

バン、とテーブルを強く叩いて七瀬が立ち上がる。やかましい女だ。

「あ、お誕生日なんだ。おめでとう」

「ありがとう」

今度は笑顔。いつも気だるそうにしてるわりにはコロコロ表情が変わる。何がそんなに面白いのか不思議に思う。

「どこ行くの？」

「山城リトルパーク」

山城リトルパークは県中央部の南、その名の通り山沿いにある田舎の小さな遊園地だ。ちなみに俺はまだ行ったことはない。

「山城リトルパークかー、実は行ったことないんだよね、俺」
珍しいな、泉は行ったことないのか。

「え、泉。行ったことないの？ 何かありそうだと思ってたから」

「家族で出かけるときはいつもサッカー関連だったから。草サッカーとかスタジアムとか」

思い出した。泉の家は一家総出でサッカーバカだったっけ。

「私は一回だけ」

「私も小さいころに一回だけー！」

確かに、お嬢様ってのはあまり遊園地みたいなところに行かないものなのか？ そもそも七瀬はお嬢様ですらないだろうけど。

「一時間半くらいだったけ？ いいな、行こうよ！ でも、僕でいいのかな……」

「いいから、誘ったの」

七瀬は決まりだね、と泉の手を握って嬉しそうに振り回している。
「……それには俺も含まれてるのか？」

「当然じゃん、アンタには誕生日プレゼント上げたでしょ？ 協力してよね」

「おいおい、菓子もらっただけじゃねーか」

「何々？ 百合ヶ丘のお嬢様のデートのお誘いを断るの？ 感謝してほしくらいね」

「おいおい、マジでコンビニで買った菓子しかもらってねーぞ。お嬢様のおの字もない女に言われたくない。」

「柳田はもう誕生日終わったの？」

「ああ、俺はかなり早いから」

残念、祝えなかったと泉。そういえば、泉の誕生日はいつなんだろうか。そのうち聞いてみるとするか。

「決まりかしらね？」

「仕方ないな。これで貸し借りなしだぞ」

「決まり！ 屋代駅の改札に8時半集合ね。遅れちゃダメよ、それとプレゼント募集中だから」

「ずけずけとコイツは……。まあ、たまにはそんな1日もいいか。」

「良かったね、雪乃」

椎田が再び微笑む。そういや、彼女とは会ったばかりだな。うまくやれるといいが。

「楽しみだね。……あ、講義始まった。行こっ！」

泉の声に押されるかのようにプレハブ小屋を出た俺たちであった。

出かけよう！（後書き）

あー、遊園地行く前に1話使いきった……。途中で泉の一人称を僕に変更。数字がバラバラ。これらはそのうち直したり、統一したりします。

感想と批評お待ちしております。

バカとバカ

「よお、間に合うか」

8時半より少し早い時間にバスは駅についた。時間を見ながらコンビニにより、簡単な買い物をした。まだ大丈夫なはず。

「もう少しで置いてくところだったけどね」

七瀬はフフンと笑う。誘ったくせに置いていって仕方がないだろう……。彼女のファッションは、上はクリーム色のパーカーに桜色のトップス、下は膝上までの紺のハーフパンツ。そして、女性ものの白のバッグを肩にかけている。胸元にはネックレスで、なるほど見た目だけはお嬢様だ。見た目だけは。

「おはよう、柳田」

泉は白に風景がプリントしてあるTシャツ、その上に青い半袖シャツを羽織り、下はジーンズだ。白に近い薄茶のショルダーバッグを肩にかけている。

「おはよう」

椎田はピンクのワンピースに、上は白い半袖の羽織り。肘にはワンピースとお揃いのピンクのバッグ。シンプルだが整った顔立ち、スラッとしたスタイルと合わせると、ほう、と息をついてしまうほどの美少女、いや美女だ。

俺は黒の半袖シャツに白のパーカー。後はちよいダメージのジーンズでシンプルに。

「ほらよ」

手に持ったビニール袋を七瀬に押し付けた。七瀬は何だろう、と受け取る。

「さっそくプレゼント？ ……って、そのコンビニのじゃん」

「ほら、電車乗るぞ。ぶつくさ言ってる置いてくぞ」 自動改札機にタッチする。七瀬はアンタのほうが遅かったじゃない、とか後ろでわめいている。

「そうだね、じゃあ、行こうか」

「ええ、プレゼントは電車の中で」

「あつ、ちょっと待って」

ホームには既に北見行きの電車が来ており、発車ベルが鳴るところだった。慌てて乗車すると、何とかボックス席を確保した。車内は休日の朝だけあって、人はそんなに多くない。自分たちと同じ行き先だろうか、はしゃぐ子供をなだめる家族連れや、帰省帰りの大荷物を持った人など様々だ。

「ボックス席が空いてるなんて運が良かったね」

「始発だからこんなもんだろ」

「何これー！ チョコレート？」

七瀬がさっき渡したばかりのビニール袋の中身を取り出した。

「お前だってチョコだっただろうが」

「だからってコンビニってちよつと有り合わせすぎでしょ」

「あなの、小遣いだって多くないんだ。もらえるだけ感謝しろ」

「むー」

どこまで図々しいんだ、コイツは……。

「私も食べ物で悪いけど……、ハイ」

椎田は可愛くラッピングされた小さな袋をバッグから取り出して七瀬に手渡した。

「わー、ありがとう。中身は……、クッキー！」

「手作りなのよ」

「本当に！？ やったー、瑞穂のクッキーおいしいんだよね。この料理上手ー」

「そんなことないわ」

七瀬が小突くと、椎田が小さく顔を横に振った。

「仲良いな」

「うん」

泉の耳元で囁くと、同意の返事が帰ってきた。

「いいよねー、私は料理しないからさー。たまに練習はさせられる

けど。瑞穂をお嫁さんに貰える人は幸せだよー。むしろ私がもらいたいくらい」

「ありがとう、雪乃」

七瀬が笑顔で椎田に抱きつく。椎田は子供をあやすように七瀬の頭をなでる。

「おい、ちょっと待て」

「何？」

七瀬は抱きつきながらこちらを見る。

「俺の時と違いすぎだろ」「なあに言ってるんよ、あんたの有り合わせとは違うの」

目を瞑り、べー、と舌を出す。コイツは……！

「瑞穂のは愛があるのよ、愛が。ねー」

「フフ、ありがとう。でも、チョコレートにも感謝しなきゃよ？」

「はい、柳田もありがとうー」

適度な返事だ。ったく……。

「僕のは手作りとかじゃないけど、はい、誕生日おめでとう」

泉はショルダーバッグからやや大きめの箱を取り出した。表面には伊達政宗をコミカルに描いたキャラが馬にまたがって、刀を掲げている。

「ありがとー、仙台かな？」

「うん、この前の休みに家族で仙台まで行ってね」

「サッカー？」

「そう」

仙台といえば……。

「仙台ワンアイドルゴonzか」

「そうそう」

「確か勝ったんだっけ？」

「2ー1でね。遠くまで観に行ったら甲斐があったよ」

「まあ、仙台はJ2上がりだからな。勝ち点拾ってくれないと」

「でも、向こうのフリーキックで先制されたときはヤバいと思った

よ」

「韓国代表のキムか、要注意だな」

去年J2で二位の仙台のウリは、堅守と韓国代表のキムから始まるセットプレーだ。

「でも、その後にロベルトが決めるとこっちのペースになって、試合終了間際に野田がゴールを決めたときはもう……！」

泉は両手を使ってその時の喜びを必死に伝えようとしている。

「これで少しは順位も上がったかな」

「でも、センターバックの飯原がケガをしちゃって……、ボランチを下げて対応したけど、次の試合はどうなるかな」

今度は腕組みしてウンウン唸る。飯原は高さを活かして守備の要に活躍している。簡単に代役を用意できるわけでもないし、これは少し困る。

「あのさ」

え、と泉が顔を七瀬に向ける。俺も考え事していたので、視線だけそちらに動かす。

「アンタらってホント……」

一呼吸おいて、呆れたように。

「サッカーバカだよな」

言われて泉と顔を見合わせると、彼はにへらと笑った。

「そうだね」

「まあ、間違っちゃいない」

あー、またいつもの癖だ。ブランクあったのに、今はサッカーバカに違いないほど、のめり込んでる。まだ全てを受け入れたわけじゃないが……。

電車は豊かな田園風景の中をスケッチブックに引いた一本の線のように、真っ直ぐ走っていた。

バカとバカ（後書き）

感想と批評お待ちしております。

意外な事実

途中で電車を乗り換えると、俺たちは一路、南へ向かう。まだ北陸新幹線は完成してないが、その先には長野があり、更に進むと関東・東京が見えてくる。

遊園地前の駅に到着して、外に降りると目の前の遊園地はすでに賑わいはじめた。

「今日は乗り放題なんだよね」

「そ、チケットは向こう！ さあ、早く行こう」

「雪乃、走ると危ないわよ」

喜ぶ七瀬とそれに引つ張られる椎田。泉も賑わいに驚きながらそれを追い掛ける。その中であって、俺は一人駅を振り替える。

（思えば、この路線で俺は東京に別れを告げて北見県に来たのか）

既に人影の失われた小さな駅は、何も言わずただそこにたたずんでいる。俺はは果たしてここに迎え入れられたのか？ 賑やかな遊園地とは対照的に静かな人工物は次のダイヤまでまたじっと待ち続けるだろう。

「おーい、柳田ー」

「ぼーっとしてるとアンタだけ置いてくわよ！」

「ああ、悪い」

すでに三人は遊園地の入り口に達している。ひとりごちる暇もなく、俺は慌てて追い掛けた。

「さて、まずはどれから乗ろうか」

山城リトルパークはそれほど大きくない。乗るアトラクションを選ぶほど広くはないが、一通り揃っている。地図の前に立ち、俺たちはどこへ行こうかと話し合おうとしていた。

「お化け屋敷！」

「ええ！！」

七瀬が地図を指さして、いの一番に叫ぶ。

「何で一番最初にお化け屋敷なんだよ、最初はまあ、小さめの乗り物系とかな……」

「今日の主役は私！」

言い返す俺に対して、ビシッと指を立てて偉そうに七瀬は言う。まったく、聞き耳を持ちやしねえ……。

「そうね、今日はあなたが主役だもんね。いいわ、行きましょ、雪乃」

「瑞穂大好きー！」

いちいち椎田に抱きつく七瀬。椎田も甘やかしてるんだか何だか……。

「じゃあねえな、ほら行くぞ」

「ちよっと待って！」

「あん」

今度は何だと振り向くと、七瀬はトランプを持ってどれがどれか隠しながらその手をこちらに突き出した。

「遊園地だから、ペアでしょー。で、クジよクジ。これで黒同士と赤同士が組むの」

そういや、アトラクションはペアのものが多いな。ここはコイツの話に乗ろう。

「男とか女とかは分けるのか？」

「分けないよ！ 私と瑞穂が組むこともあるの」

そうになると、俺は泉とか……。って泉、顔色悪いぞ。

「おい、大丈夫か」

「こ、ここのお化け屋敷怖いって有名なんだよね。だ、大丈夫だよね？」

「さあな」

俺に聞くな、俺に。コイツ、ビビりなのか？

「じゃあ、引くぞ」

まあいいや、とカードを引くとハート。椎田と泉も各々カードを

引いていく。「僕はクローバー」

「私はダイヤ、柳田君とペアね」

「じゃあ、私は泉とね。大丈夫ー？」

「よ、よろしく」

「椎田、行こうぜ」

「ええ」

ペアが決まれば話は早い。目指すはお化け屋敷。どうせ、大したものでもないだろう。

近づいてみるといかにもな外見で、田舎にしては少し頑張りましたというふうな建物があった。

「じゃあ、先に入るぞ」

あの分だと、泉達を先に入れると追い付きそうだ。こちらが先に行くのが賢明だろう。

「行きましょうか」

まだお化け屋敷が混む時間でないせいか、ほとんど待つことなく入ることができた。ガイドの指示に従って建物に入ると、中は薄暗くなっており、そこかしこに病院とおぼしき品々がある。赤く染まった床、散らばるカルテ、切り裂かれたベッド。

「大丈夫か？」

「ええ」

横にいる椎田に聞くと、意外にも気丈な返事が返ってきた。ちょっとは怖がると思ったが、お嬢様は意外とたくましいようだ。

更に進むと、手術室が見えてきた。手術台にはバラバラの人、いや人形か。いやにリアルに作られていて、正直気味が悪い。隣の部屋は準備室のようで、血塗られたロッカーが並び、中央にはテーブルとソファ。部屋の中に入ると……。ガタン！

「ヴァアアアア！」

ロッカーが突然開き、中から顔が半分欠け、片腕だけの医者ゾンビが現れた。

ヒュン。

そちらに気を取られると、顔に何かが飛んできた。掴んで見ると、このゾンビの失われた半分の顔だった。かなり細部まで作り込まれており、目などは本物のようだ。

なるほど、泉の言った通りこれはかなり怖いだろう。有名なことも納得できる。だがまあ、この程度か……。

「大したことないな」

飛んできた顔の半分を投げ返す。ゾンビもすごすごとロッカーに帰っていった。

「ちょっと驚いたわ」

椎田は微笑んでいる。けっこう強いらしい。これなら大丈夫そう
だ。

「サクサク行くか」

「ええ」

俺は足を引きずったままだが、椎田はそれに合わせてくれている。気遣いもできるのか。

道中、さらに看護師や患者のゾンビが襲ってきた。さすがに上半身のみで追い掛けられると少し驚いたものの、じっと見つめていると皆すごすごと帰っていった。

「拍子抜けだな」

そろそろ5分経つ。泉たちも中に入ったか。

「柳田君」

「ん？」

立ち止まって椎田の顔を見ると真剣な、だが柔和さを感じる表情だった。

「少しお話があるの」

「話？」

「雪乃のことなんだけど、……最近良く笑うようになったの」
付いたり消えたりライトが俺たちを包む。

「2年になってクラスが別々になって、あのコのこと心配してたの。
あまり周りに馴染めてなくて、無理してて」

頭の後ろで腕を組む。そりゃそうだろう。あんなお転婆、百合ヶ丘のお嬢様と気が合うわけがない。

「それが最近、予備校が楽しいって笑顔で話すようになって……。聞いたら、柳田君と泉君のおかげみたい。だから、感謝したかったの」

そう言うと、椎田は再び微笑んだ。これは普通の男ならコロリと落ちる。すごい美貌だ。いや、清楚な雰囲気もあるだろう。烏の濡れ葉色も妙に艶やかだ。

「大したことじゃない」

「大したことよ！ あのコ、家も大変だから」

ん、と立ち止まる。家の中が大変というと、荒れてるとか？ それを無理に振る舞ってるとか？

「雪乃、話してないのかな？ ……あのコ、家政婦さんもいる豪邸に暮らしてるのよ」

意外な事実（後書き）

感想と批評お願いします。

お嬢様のお許し

「本当に知らなかったのね」

俺はポカンとして、我ながら間抜けな面だが、椎田に問う。

「アイツが？ お嬢様？」

「七瀬不動産って知らない？ 昔からの地主の家でかなり広い土地を貸してるの。今は新しいけど、以前は旧家に住んでいたのよ。だから、家がとっても厳しくて」

呆氣に取られたままの俺をよそに彼女は続ける。

「学校でも家でもお嬢様を演じていて、私と初めて会った時も造られた人形のようなだったわ。後でそのイメージは崩れたけど、何もなかったらきつと気付かなかった」

造られた人形？ 予備校でのアイツにはそういったイメージは全然ない。そういえば、百合ヶ丘の生徒は、ウチと同じ系列だが、学校の近くにある屋代北校にほとんどが通っている。屋代校にもいなくはないが、だいぶ少数だ。

「たぶん、この予備校を選んだのもウチの生徒に会わないためかもね。私はたまたま近いから選んだけど……」

「つまり、何だ。ひよっとすると百合ヶ丘でもかなりのお嬢様ってわけか？」

「ひよっとしなくてもそうよ。あんな豪邸、めったにいないわ。旧家のほうも残っているし」

何てこった。これは予想と全く真逆を行っている。あのお転婆のどこがどうなって、お嬢様なんだ？ むしろ庶民の出と言ってくれたほうがしっくり来る。

「そんなあのコが楽しそうだったから、きっと良いお友達でもできたのかな、って……。ありがとう」

深々と頭を下げる。長く美しい黒髪も主の動きに従う。まだ信じられない俺は何と言えいいのか、言葉に詰まる。

「い、いや、礼は……」

「うわああああああ!!」

突然の悲鳴。驚いて後ろを振り返るが、誰もいるはずがない。遠くから聞こえてきた。

「泉？」

「みたいね」

聞いた声だ。まあ、泉がかなり怖がっていたのは確かだが、さっそく医師のゾンビにでもやられたのだろう。

「そうね、合流してもつまらないし……。雪乃には悪いけど、もしかすると泉君走ってくるかもしれないから、早く行きましょう」

「あっ、ちょっと待ってくれ」

急に早歩きになった椎田を、引きずった足で追い掛けた。

「もう最悪!」

「ゴメン……」

七瀬の機嫌は悪い。隣には申し訳なさそうに頬を抑える泉が、繰り返し頭を下げて謝っている。

「どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないよ! コイツってば、ホント最悪だったんだから!」

「ご、ごめんなさい」

「指差すのは止せよ、何があったんだ」

激昂する七瀬を制するが、彼女はまだわめきちらしている。泉が何かやらかしたようだ。

「コイツがいきなり抱きついてきたの! 泉はお姫様の騎士役でしょ? それがいきなり悲鳴をあげて抱きついてきたのよ!」

「ご、ごめんよ、七瀬……」

「もう知らない! 私だって怖かったのに」

七瀬は怒り心頭だ。どうやら、泉はあまりの怖さに彼女に抱きついてたらしい。普通ならば女子がやる役を全く真逆でやってしまった

わけだ、しかも主役相手に。そのうえ、半分セクハラみたいになつてしまったので、余計に腹立たしいのだろう。泉の左頬の赤い紅葉が痛々しい。

「まあまあ、雪乃も落ち着いて。泉君も謝ってることだし……」

「あー、瑞穂まで！ もう次行こ、柳田！」

「あ、ああ……？」

彼女は両肩をいからせながら、小さな体で精一杯怒りを表すかのようにずかずかと歩いていった。仕方なく追い掛ける。

「ごめんね、泉君。あのコ、ああ見えて男の子と手を握るのも苦手なの」

「え、そうなの？」

椎田がそつと泉の耳元で囁く。泉はやや驚いてる。そういえば、生粋のお嬢様育ちなのだ。箱入り娘がいきなり抱きつかれたのだから、ぶつたまげたのだろう。しかし、泉に騎士役は無理があんだろ……。

「おい、次はどこに行くんだよ！」

前を早足で歩くため、引きずった足のために追い付けない俺は、まだまだ怒りで震える小さな背中中に声をかけた。

「スプラッシュマウンテン！」

「わかったわかった。一緒に行つてやるから、もう少しゆっくり歩いてくれ」

不機嫌そうに叫ぶ七瀬に頼むと、こちらに半身で振り向いて苦虫を噛み潰したような表情で待ってくれた。何だかんだで一人は嫌なんだろう。七瀬の行動には少なからずそういうところがある。

スプラッシュマウンテンではペア組はなかった。自動的に俺は七瀬と組み、後ろに泉と椎田が乗っている。泉はまだ小さくなっている、椎田がそれを精一杯慰めている。

七瀬の方はというと、相変わらずムスツとしたまま腕組みをして、遠くをじっと見つめてる。思えば、ちょっと気の毒だな。きつと今

日を楽しみにして、アトラクションを回る順番も考えてきたんだらう。決して何も考えてない女じゃない。

改めて横顔を見てみると、感情ははっきりしてるが、芝居をするときはうまいと思う。つまりは人形としてうまくやってきたわけだ。少し失礼だが、特徴と言えるほどのものに欠ける彼女の顔も、椎田の話を聞いたあとでは少々高貴にも感じる。決して睫毛も長くないし、目も大きくないが、笑うと可愛いほうだろう。コロコロと変わる表情こそが彼女のウリである。

スプラッシュマウンテンはさほど大きなアトラクションではなく、適度に水しぶきが飛んで気持ち良く終わった。

「ひゃー、気持ち良かったね！」

七瀬は少し濡れた前髪を手で払いながら喜んでいる。今さっきの怒りも収まったようだ。呆れるほどの切り替えの早さも七瀬の良さだ。

「良かったね、雪乃」

こちらは相変わらずの烏の濡れ羽色。色っぽさが増し、さらに美貌に磨きがかかっている。水もしたたるいい女、とはこのことか。思えば、七瀬がお嬢様ならこっちは何だ？ 由緒ある名士の家系とか？ はたまた大病院のお偉いさんの一人娘とかじゃなからうか？

「私、考えたの」

七瀬はまた腕組みをして、今度はウンウンとうなずいている。

「泉、目をつぶって」

「うん？」

不思議そうな顔をしながら目を瞑る泉。自然と直立不動になり、意味を察したのか次に何をされるのか顔を引きつらせている。

「何するんだ？」

「そりゃもちろん……」

ピシッ。

「痛っ」

でこぴん一閃。

泉がおでこを抑えて、もういいよね、という風に目を開ける。ジンジン来るんだよね。

七瀬は腰で手を後ろに組ながら、ちょっと前まで歩くと、くるりと上体をこちらに向ける。

「これでチャラにしてあげる！」

笑顔で。相変わらず切った張ったが好きなヤツだ。面白い。

「泉君、大丈夫？ 雪乃ったら、もう」

「乙女の柔肌に触った罰だよーん」

七瀬はダンスをするかのようにステップを踏んで答えた。

「くどいようだけど、わかってあげてね。経験がないから、自分でもどうすればいいのかわからないのよ」 椎田は可愛いけれど少し困った妹を見るように、優しい眼差しをしている。泉は泉で、許してもらえて嬉しいのかまだ七瀬にペコペコと謝ってる。

気分屋のお嬢様に振り回される。たまにはこんな休日もいいか。

お嬢様のお許し（後書き）

七瀬はかなりのお嬢様です。なら、椎田は……？
しかし、泉はこの程度で終わって良かったですね。
感想と批評お待ちしております。

次の乗り物は……

「じゃあ、次はコレね！ 午前中のクライマックスだよ！」

七瀬が指差す方向には歪んでいるほどに曲線を描くジェットコースター。その名も『大回転』。一回転するのが何度もあるからだそうだ。

「また、すごいのを取っておいだな」

長い行列に並びながら見上げると、それだけで吐き気がしてくる。狂人の筆で描かれたようなその形はとていびつで、エンターテイメントというよりも間違って置かれたモニュメントにも見える。

「お化け屋敷もすごいけど、こっちも有名だよ。他県から来る人もいるくらいだから」

「すごい形よね」

泉と椎田は巨大な造形物を見上げる。風が椎田の髪を巻き上げ、ふわりとシャンプーの香りが鼻に入り込んでくる。

「あ、期待してもダメだからね！」

「ん、俺？」

「瑞穂もスカートじゃダメだよ。デニムなかったっけ？ とにかくこうね、こう！」

七瀬は足を内股に追って椎田に合図を送る。コイツ……！

「誰が見るか、誰が！」

「クールぶって、こういうタイプがいちばっ……ひててっ!？」

「この口は、さっきまでわめいてたかと思っただら……！」

七瀬の頬をつねりあげる。生意気な言葉と裏腹に、指の腹には柔らかな感触。……あ、お嬢様だったんだっけ、コイツ。

「痛い！ 助けて、瑞穂」

「今のは雪乃が悪いのよ」

抱きつく七瀬を椎田は仲の良い姉妹のようにめっ、と叱る。

「仕方ない、瑞穂の顔に免じて許してやる」

「何様だ、お前は」

椎田の影から左手で赤い頬を押さえながら、こちらを指さして偉そうに言う。どうしてこう、コイツは……。

「あ、そろそろだね……。さっ、好きなのを引いて」

乗車時間が近づいてきて、再びかざされる四枚のカード。左から2番目を引く。

「スピードだ」

「僕はクローバー、柳田とペアだね」

「なら、私は雪乃とペアね」

「やったー、瑞穂とペアだー！　むっさい2人なんて気にせず行こ行こ！」

「あ、雪乃、引っ張らないで！」

否、姉妹のように、というより姉妹だ。椎田が姉で七瀬が妹。そういえば、椎田はもう誕生日を迎えたのか？　実際の年齢では逆かもしれない。

「これ、絶対にすごいよ。ちょっと怖いね」

「そうだな、さて乗るか」

ジェットコースターなんて久しぶりすぎて、前にいつ乗ったのかなんて覚えていない。小学生のころは身長制限で引っ掛かったから、もしかしてこれだけの物は初めてかもな。

七瀬とそれに引っ張られた椎田が前に座って、俺と泉が後ろに座る。安全バーが下ろされ、職員が乗り物から離れるといよいよジェットコースターは上へ上へと昇っていく。なるほど、緊張感というか高揚感是这样やって煽られるのか。

「キヤー！！」

もういいだろう、という所まで来た瞬間にかかる重力。上下左右に引き寄せられては急に手を離される不思議な感触。そして始まる何重もの曲線と回転。

「うわああああー！！」

泉が腹の底から出す声に押されながらも、俺も自然と声が漏れる。

「うわっ、うわあ！」

ガクンガクン、という急停止が狂騒曲のタクトの幕引きを示していた。

「で？ これはどういうこと？」

小柄な七瀬の気だるそうでいて不機嫌な声が、今日は上から聞こえる。

「仕方ないよ、柳田が叫ぶくらいだもん」

「私的にはまた泉が失神でもするのかと思ったけど。よく声が出るのね、アンタ」

「ははは……」

「泉君のは楽しそうな叫び声だったから、大丈夫だとは思っていたけど……。柳田君、大丈夫？」

「わりい……」

頬に触れる缶ジュースの冷たさが気持ちいい。俺は右手でそれを受け取ると、今度は額でその冷たさを感じた。

時は2、3分前にさかのぼる。ジェットコースターが終わって立ち上がった俺は喉の奥から込み上げるものに抑え切れず、制止を振り切りトイレに駆け込んだ。……その後は推して知るべし、といった所だ。

「まっさか、アンタがこんなんでご参っちゃうとはね」

「うっせー……」

ベンチで横になったまま声を絞り出す。七瀬のケラケラと笑う声が憎らしい。

「……っと」

「大丈夫？ こぼさないようにね。飲める？」

「スマン……」

何とか上体を少し起き上がらせて、ジュースを口に含む。冷たい感触が口から腹へと伝わっていく。

「しかし、どうするかしらね。これじゃ、食事は無理でしょ」

「ちょっと休んでようよ」

「……先に回っててくれ。回復したら追っ掛けるから」

「そう？」

「というか、休ませてくれ……」

俺はハンドタオルで顔を覆うと再び横になった。全員ケロッとした顔しやがって……、気持ち悪……。

「どうしようか」

「本人がこう言ってるからいいんじゃない？」

「そうだけど、七瀬、誰か付いていないと……」

静かにしてくれ……。声を絞りだす余力もない俺は右手の甲を額に当て、そのまま落ちていく意識に身を任せた。

「父さん、見て見て！」

「ああ、昂司」

「あんまりはしゃいじゃダメよ、昂司」

まだ小さかった時、当時の自分には巨人にも見えた父さんに肩車してもらいながら、豪華なイルミネーションの中を家族三人で歩いた。忙しい両親の久しぶりに一致した休日、一度だけ遊園地に行ったことがある。その広さ、豪華さ、雰囲気全てに小さな俺は飲み込まれていた。その後、起こることなど未だに知らなかった俺。父さんの顔は少しおぼろ気だ。

急に意識が正常に戻ってくる。

（あのころは良かったな）

今はサッカーはおろか満足に走ることの出来ない右足を抱えて、慎重しやかに生きている。仲間もできたが、その期待に応えられているのか？

「ん……」

体の向きを少し変え……フニ。

「……ん？」

頭の下で温かい感触。何だ、これは？

「あ、起き……」

ゴチーーン。

「っ痛えっ」

「あいたた……」

急に起き上がった俺は誰かに頭を正面衝突させた。重低音が頭に響く。ハンドタオルが顔からずり落ちて、……って椎田か！

「起きたー？」

「いい音したけど、大丈夫？」

上体を起こすと、芝生のほうから後の二人が駆け寄ってくる。まだ額がズキズキ痛む。

「いてて……。何だよ、いったい……」

「さっすが柳田、やってくれるわね。瑞穂、大丈夫ー？」

振り向くと、椎田が頭を抑えてうずくまっている。

「うん、ちよっという感じに当たっちゃって……」

「ほら、柳田謝る！」

「あ、こっちの台詞だ！ 何だこれは！」

「何って、ハイ」

七瀬が何かを一枚俺の腹の上に落とす。トランプ？

「私、スピード」

「僕がクローバー」

「私がハートね」

ってことは俺がダイヤか、ではなくて！

「こ・れ・は、ど・う・い・う・こ・と・だ!!」

俺はまだジンジン痛む額をさすりながら、椎田の膝を指差す。膝？

「何って、膝枕」

さも当然、といった風に七瀬は答える。

「で、アンタのペアは瑞穂だったわけ」

「僕じゃなくて良かったね、柳田……」

泉が苦笑いする。

「だから、何で膝枕する必要があるっ！ これをどうしてくれるっ

！」

「額をぶつけたのはアンタでしょー。瑞穂に謝りなさいよ」

「私は大丈夫だから……」

「それに、百合ヶ丘のお嬢様の膝枕よ。感謝しなさい！」

「本当に僕じゃなくて良かったよ……」

「それとも、泉が良かったの？ アンタそういう趣味？ もしかしてもうデキていたとか！ 瑞穂ー、聞いてー！」

「こら、雪乃。あんまり大きい声で言わないの」

「そうだよ、周りに聞かれたら……」

「やっぱりお前かつ！」

ガッ、と七瀬の胸ぐらを掴……スパーン！

「スケベッ！」

「あっ！ またいい音……」

「柳田君、大丈夫……？」

何なんだ、いったい！

「で、何か？ 人が寝ていたのをいいことに、また悪巧みをしたってわけか？ あ？」

「盛り上がったじゃない！ それに、瑞穂の膝枕なんて私がしてもらいたいぐらいよ！」

「嫌ね、雪乃。私達の仲じゃない。言ってくればいくらでも……」
「僕は止めようって言ったんだけど……」

取っ組み合い寸前になりながら口論を繰り広げる俺と七瀬を椎田と泉が止める。

「今日の主役はアタシよ！ 企画・立案までやってるのよ！」

「企画・立案だあ！？ 挙げ句、張り手かあ！？」

「それは、アンタが変なところを触ろうとしたからでしょ！」

「色気の“い”の字もない女が偉そうにっ！」

「ハイハイ、二人とも。あんまりやってると次のに乘れないわよ？ また並ぶかもしれないんだから」

取っ組み合おうとした俺達を椎田が間に入って制す。

「次？」

「アレ」

七瀬が指差した先にあるのは……一瞬で上昇し、次に一瞬で下降する絶叫マシーンが。

「てめえっ、今を見てなかったのか！ この女！」

「やる気ね！ いいわよ、とことんやってやろうじゃない！」

「あわわ……、二人とも……」

「ほら、そこまで」

こうして、俺の苦難はまだ続いた。

次の乗り物は……（後書き）

たぶん、この2人は仲いいです。

ちなみに、最後の絶叫マシーンの名前は『瞬間移動』です。
感想と批評お待ちしております。

天空の車輪

「次は何だ、次は……」

へとへとになりながら俺は尋ねた。『大車輪』の後、絶叫系は乗らなかったものの、小さなアトラクションにはいくつか乗った。どうも吐き気の沸点が低くなったようで、最後にコーヒーカーップに乗ったときには、七瀬に思いきりグルグルと回されたために今はもうバテ気味だ。

「最後は……、アレ！」

「ん……」

そこには夕暮れに染まりつつある空にそびえ立つ巨大な円。観覧車だ。

「ちょっと歩くみたいね」

「うん」

山城リトルパークは山の中腹を切り開いて作られていて、その中でも観覧車が一番目立つ丘の上にある。その袂へと続いている階段を昇ると、徐々に喧騒から離れていき、いつもの静かな夕方が近づいてきたようにも感じる。

「わぁ、すごいものね」

「うわぁ……。泉、柳田、見て見て！」

立ち止まった椎田が後方を見やる。七瀬がそれに続き、驚嘆の声をあげる。

「これは、すごいね……」

「ん……」

眼下には少しずつ終焉へと向かうモニュメントと、夢見心地を惜しみながらも家路へと向かう人々。そこにはまるで日常と非日常の境目が存在するかのようだった。

「いい景色ね」

「……そうだな」

一步、また一步と丘を上るたびにその光景は遠く離れていく。耳元を通り抜ける風も徐々に涼しくなっていき、あたりはだんだんと暗くなっていく。

観覧車の袂に着くとその巨大さに圧倒された。どうやらすっかり北見県での生活に慣れたらしい。小さいころに見た東京の高層ビルを思い出す。

「でっかいなあ……」

「上からはもっと遠くまで見えるかしらね」

「待ちきれない！ さあ、乗ろう！」

さすがに今回はランプはなくて、四人で一つの籠に乗る。椎田の手を引く七瀬は飛び乗るように、俺達は静かにいつものプレハブ小屋のようなそれに乗った。

観覧車は風に揺られながら徐々に高度を上げていく。少しずつ黒に染められていく空を眺めながら、俺はその頂きに到達するのを待った。

俺は観覧車が好きだ。大して乗った経験があるわけじゃないが、天を切り裂いていくこの乗り物には何度も乗ってみたくなる魅力を感じる。特にこの、徐々に高度を上げていく瞬間はあの人と同じ感覚になれているんじゃないか、なんて思ったりする。小さな、ほんの小さなこじつけが俺を何度も天へ、空へと導いていく。この壮大な空にあなたは今日もいるのでしょうか？

「わあ、見て見て、あれが温泉街？」

「あの先にあるのがお城ね」

巡らせた思いをいったん止めて、声の導きに向かって視線を動かしてみると、そこには壮大な風景が広がっていた。先ほどの光景は小さくなり、駅を挟んで向こう側には山城町の通りが見える。温泉地で有名な同地は建物に灯りが灯りはじめ、通りは連休の最終日ながら観光を終えた人々で賑わっている。更に遠くには山城の地名の元になっている一つの城が夕闇の中、静かにそびえ立っている。

「あの城と温泉街も有名らしいよ」

「へえ……」

「いつか行ってみたいな」

「そうね……。じゃあ、こうしない？」

椎田が何か思いついたように一本だけ指を立てる。

「来年は泊まり掛けでどう？」

「瑞穂、それ名案！ 決まり！」

椎田に抱きつく七瀬。子供をあやすような姉と、目をキラキラさせて楽しみを待つ妹のようだ。

「泊まりだって。どうする？」

「……いいんじゃないか」

泉は思いつき嬉しそうな顔をしている。そりゃそうだろう。百合ヶ丘のお嬢様と四人でお泊まりなんて、近所の男子高校生に聞かせたら羨ましがるどころか袋叩きに合いそうな話だ。あ、そういや泉は七瀬の素性を知らないのか。

（知ったらどんな顔するだろう……）

じっと泉の顔を覗き込む。

「どうしたの？」

「あ、いや、何でもない」

泉より多少付き合いの長い俺が驚いたくらいだ。泉ならさぞ言っただけなのに驚くくらいの大声を響かせることだろう。

「来年のゴールデンウィーク空けときなさいよね！」

「楽しみね」

というか、この二人は親の許しが出るのだろうか。ただでさえ物騒な昨今、育ちのいいお嬢様の親がはい、そうですかと許してくれるもんだらうか。

「そうと決まったら、何が何でもOKしてもらわなくちゃ！ よーし、今日から頑張るぞー！」

「わっ、揺らすな」

「あー、怖がってるー？」

「怖いとかじゃない、危ないって言う意味だ、このバカ！」

「バカって言ったほうがバカなのよ!」

「何すんだ、この野郎。ひてて……」

「いった! ちょっと髪引っ張らないでよね!」

「ストップ! 止めて、緊急停止しちゃう!」

「最後の最後に怒られちゃうの!」

ガッシャンガッシャン揺れる籠の中での取っ組み合いは椎田の必死の制止で、またもや双方痛み分けでやっこのこと納まった。最後まで騒がしい女だ。

天空の車輪は徐々に高度を下げ始めていた。

天空の車輪（後書き）

あまり遊園地でやんちゃをするのは止めましょう。
感想と批評お待ちしております。

あなたのお家は？

「で、これかよ」

電車の中で俺はイライラして、一人呟いた。七瀬はあの後もまだ帰りたくない、とゴネた末に電車に乗るとすぐに椎田の膝に覆いかぶさって寝てしまった。

「そう思わねえか、……って」

声をかけた泉もすでに意識は夢の中。ひじ掛けにもたれかかるように、電車にいいように揺られていた。「疲れてるのよ」

呆れる俺に七瀬の頭を撫でながら椎田が声を掛けた。七瀬と違い、終始品のある立ち居振る舞いを続けた彼女は生粋のお嬢様と言えるだろう。

「あれだけ騒いで、終わったら寝るなんて子供のすることだろ」

「私達は子供よ」

「そうだけだよ」

「過ぎた時間は還ってこないし、まだ何でもできる年頃じゃないわ」
「……」

ね、と七瀬の頭を撫でる。気持ちよさそうに寝る七瀬は何か寝言を呟いている。

改めて椎田の顔を見やる。やっぱり言葉の一つ一つに品の良さが表れている。七瀬のせいでだいぶイメージが崩れたが、百合ヶ丘のお嬢様っていうのはこういうもんだろうと見せ付けてくれる。

（さもありなん、ってところか）

容姿、言葉、行動。全てが気品に満ちている。それでいて今の自分をきっちり見分けている。一人の女性として素晴らしい。

（うちの親も尊敬すべきだが）

ただ、コロッと物事を変えてしまうところが母さんの悪いところで、離婚の原因だって母さんの気変わりもあるんじゃないか、と思う。結婚だってスピード婚で、堅物の父さんをさっさと物にし、そして

十年ちよつとで別れてしまった。どちらかっていうと、七瀬は母さんに似ている。それが百合ヶ丘はおろか屋代全体でもトップクラスのお嬢様って言うんだから笑わせてくれる。

（女ってわけわかんねえよな）

同意するどころか眠りこける泉の鼻っ柱をピン、と弾く。よっばど疲れているのだろう。こちら心地よさそうに寝ている。

「わかってあげてね」

「何をだ？」

椎田は愛犬の毛を研ぐように、七瀬の髪を手で梳く。思えば、彼女は椎田に引っ付いてばかりだった。いつも気だるそうにしている彼女がここまでご執心なのだから、よっばど仲が良いのだろう。

「このコが今日一日を私達のために使ってくれたということ」

「本人の誕生日だしな」

「そうじゃなくて！ これからお誕生会があるとしても遅れていくのよ？ このコの家ではなかなか許されないことよ」

言われてみればそうだ。厳しい家なら誕生日一日まるまる空けるなんて難しい。しかも、男と行くなんて言っていないだろうがご法度かもしれない。

「楽しみにしてたみたいだし、親御さんの説得も大変だったと思う」
「そうだな」

ポンポン、と七瀬の肩を叩く。ニヤニヤしながら楽しそうに眠る彼女はどことなく愛くるしい。そうだな、コイツの努力も認めてやらないと。

「さて、そろそろ乗り換えだから起こすか。……起きろ、泉。乗り換えだ」

乗り換えた後、屋代駅で別れた一行はそれぞれ家路に着く。七瀬は自転車、泉はバスに。椎田は買い物があるとかでどこかへ行ってしまった。俺もバスへ乗ろうとしたところでメールが一通。母からだ。

「昂司へ、醤油をが無くなりそうなので買ってきて。それと、茄子と豚肉が安いから一緒に。スーパーマルセン」

今日は特売日だったかな。今からだとギリギリだが、醤油くらいは買えるだろう。

高嶺市にもスーパーと言えるほどのものはあるものの、小さいために品揃えも良くないうえ、あまり安くない。必然的に屋代駅前のスーパーで買うことが多くなる。駅前なので安くはないが、特売品を狙えばまあまあだ。休日なら車を出せばいいのだが、この前に買い溜めしたばかりだし、今日はこのくらいでいいだろう。

スーパーには人がまばらだった。もう七時を回っている。しかも、この時間帯のメインとなるサラリーマンは連休のためにお休みだ。

（後一時間で閉店か）

郊外のスーパーがほとんど営業時間を延ばしているのに比べるとこちらは決して遅くまでやっていない。俺はとりあえず醤油をデカイの一つ買い物籠に入れると、ぶらぶらと店内を歩いた。

（茄子は四個で100円）

最後の一つを運良く手に入れることができた。値段としてはまあまあだ。郊外の大型店ならもっと価格破壊があってもいいが、駅前だとこのくらいが限度だろう。

（豚肉は100gで88円。まあ、こちらもこの程度か）

二割引きがあったのですかさず買い物籠に入れる。これも郊外の大型店なら標準的な値段だろう。本当なら郊外まで出るのがいいものの、生憎高嶺市と屋代市の間には大きなスーパーがなく、本当に買いに行くなら少し遠出しなくてはいけない。母さんもなかなか忙しく、あまり無理はさせられない。必然的に細かいものは俺が駅前で買って帰ることが多い。おかげで最近は物の値段がわかってきた。我ながら所帯染みてきたな、と苦笑いする。

最後に惣菜コーナーを見て回る。本来なら高くて買うのをためらうが、この時間ならかなり安い掘り出し物がある可能性も高い。もちろん在庫があれば、の話だが。

（レバニラが三割引か……）

難しいところだが、母さんの手間が割けるならいいところだろう。取ろうとしたところへもう一つ手が伸びる。

（あれ？）

「柳田君？」

どこかで見た格好かと思いきや、それは椎田だった。どうして彼女がこんなところに？

「どうしてこんなところに？」

「お夕飯作らないとで、ちょっと時間ないから」

見ると、買い物籠の中には茄子と豚肉。……なるほど、狙いは同じだったわけか。……ではなく。

「何でアンタが買い物を？　しかも特売品を狙って」

「あら、安いものを買うのは主婦の基本よ？」

「そうじゃなくてこう……、何でまたお嬢様がこんな買い物を？」

「お嬢様？」

目を丸くして椎田が不思議そうに言う。何かがおかしい。

「え？　アンタの家、裕福なんじゃないのか？」

「やだなあ、ウチなんて貧しいほうよ？　百合ヶ丘だってかなり無理して行ってるの」

何だって？　どういうことだ？　どこぞの裕福な家庭の出じゃな

かったのか？　「ウチ、片親でね。父は仕事でいないからこうやって私が買いに来ることが多いの」

しかも、片親？　もしかして言ってることは本当なのか？

「そんな不思議そうな顔しないでよ。ウチは安アパートの父子家庭よ」

「え？」

思わず声が出てしまった。安アパート？　おいおい、ちょっと待て。

「あっ」

会話が込み入った二人を差し置いて、おばさんが最後のレバニラ

をかつさらっていった。

「あちゃ……、仕方ないね」

「それより、今の話……」

「もしかして、どこかのお嬢様かと思ってた？　ありがとう」

その優雅な微笑みはまごうことなきお嬢様でありながら、その実体は庶民の庶民。しかも下手するとウチより貧しい？

「でも、残念ながら本当よ？」

呆氣に取られる俺を見て、口元に手を当ててクスクスと笑う。そして、また俺は呆氣に取られるのであった。

「ウチは私を産むときにお母さんが亡くなってね。父は頑張って働いてくれてるんだけど、この不景気でしょ？　学費に、今は予備校にも通わせてもらっているから家系は火の車なの」

レジに向かう途中、椎田はごく普通に話しだした。どうやら、言っていることは本当らしい。

「柳田君も大変ね。特売品を狙うなんて」

「いや、ウチも片親だから……」

「そうなの？　お仲間ね」

クスリと笑うその表情にはどこにも出自を感じさせるものがなかった。

帰りのバスに乗る頃にはくたくたでへたりこむように席に座った。

あの後、遊園地にワンピースで来たのは母の形見で、他に親友の誕生日を祝うような綺麗な服がなかったこと。今日の遠出のためにお金を貯めておいて良かったことなどを話した。

（七瀬が指折りのお嬢様で椎田はむしろ貧しいほう？　……女ってわけわかんねえ）

力なく窓の外を見ると、暗闇が何も言わずに辺りを覆っていた。

あなたのお家は？（後書き）

わりと誘導があったので、わかりやすかったと思うんですが、椎田の家は貧しいです。

ちなみに、一番所帯染みているのが自分だとわかりました。これで第二章完です。

感想と批評お待ちしております。

偶然の不運（前書き）

初投稿作です。若干手直ししました。
よろしくお願いします。

偶然の不運

体育館の出入口で、俺は立ち尽くしていた。

目の前にはグラウンドと、そこでサッカーをしている同級生達。それをただ黙って見続けていた。

「……ねえ、授業終わったよ」

誰かに肩をさすられて、俺は夢の中から引き戻された。ハッと目覚めると隣の席にいる女の子と目が合った。

「起きた？」

「……うん」

ぼーっとしたままとりあえず頷く。寝ぼけ眼で周囲を見渡すと、皆は友人と談笑したり、帰る準備をしたりしている。

……そうだ。予備校で授業中だったんだ。寝てしまっていたのか。「良く寝てたねー。半分くらいは寝てたんじゃない？」

隣の席の女の子はケラケラと笑う。俺は少し罰の悪そうな表情をして、頭をかいた。確かにノートはかなり中途半端なところで終わっている。別に真面目に授業を受ける気があったわけじゃないが、さすがに半分も寝ていたのでは何となくもったいない。

「あ、ノートコピーする？あまり綺麗じゃないかもだけど」

俺の視線が白の多いノートを向いていることに気付いた女の子が言う。

「え？ あ、いや、いいよ……」

急に言われたのでつい断った。友人であればコピーをお願いしたかもしれないが、所詮は予備校の授業であるし、そのうち学校で同じ内容を習うだろうという思いもあった。

……というか、俺はそもそもこの女の子のことを知らない。ここまで仲良さそうに話し掛けられておいてなんだが。

「あ、他にあてがあった？ まあ、後でDVDを見直すこともでき

るしね」

じゃあ、という感じにその娘は参考書やノートを鞆に片付け始めた。彼女の言う通り、後で録画した授業を見直すこともできる。

「……あの、起こしてくれてありがとう」

今更ながら一応、礼を言っておく。

「え？ いいよいいよ」

軽く手を振って彼女は答える。今更気付いたが、彼女は百合ヶ丘の制服を来ている。百合ヶ丘学院といえば名門女子高として近隣では有名である。中高一貫でお嬢様ばかりと噂に聞いたことがある。

目の前の彼女は気さくな感じだが、特別お嬢様という感じではない。良く見てみると顔は真ん中くらいだろうか？ ……いや、自分も自慢するほど美形じゃないが。

「七瀬」

「あ、やつほー」

自分も帰る準備を始めようかというところで、隣の席の女の子が誰かに呼ばれたようだ。

「後ろの席にいたのか、気が付かなかった」

声の主が近づいて、……！！

（な、何でここにコイツがいるんだ？）

俺はその場を離れようと急いで片付けをする。

バサッ。

慌ててしまって、カバンの中身を床に盛大にぶちまけてしまった。

「大丈夫？」

七瀬と呼ばれた女の子が手伝おうとしやがむ。

「だ、大丈夫」

俺は下を向いたままカバンに中身を掻き込む。急がないと。

「……泉？」

その声が俺の名前を読んだ。背筋がゾクツとする。紛れもなく、彼の声だ。俺は振り向くことも、返事をすることもなく、無理やりカバンに落とし物を突っ込むと、急いでその場を去った。

「お、おい」

「あ、ちよっと！」

二人の声を背に教室を出る。

何だってアイツがこんなところに……！

偶然の不運（後書き）

感想・批評お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8917n/>

この青く広い空の下で

2011年8月3日03時30分発行